

第48回全国小中学校環境教育研究大会（福島大会）

# 「ESDの視点に立った学習指導」 および 本日の学習指導案

「地域に根ざし、未来をめざす」子どもたち



<多様な観点と見通し>



<交流と協力>

4つの

能力・態度



<つながり>



<主体的・計画的>

# 目 次

## ＜ E S D の視点に立った学習指導～白方小学校の E S D～＞

- 1 E S D の背景 . . . . . 3  
(地球規模の課題を克服し持続可能な開発を行う必要性)
- 2 E S D とは . . . . . 4  
(持続可能な社会づくりを担う人材の育成)
- 3 学校における E S D ( E S D の視点に立った学習指導) . . . 5  
( E S D の視点に立った学習指導の目標と育みたい能力・態度)
- 4 白方小学校の E S D . . . . . 8  
(各教科等で育む力と E S D で育む力の双方を高めるために)
- 5 白方小学校 E S D の授業づくり . . . . . 13  
(課題を見だし、解決、そして発展)
- 6 白方小学校の授業以外の E S D . . . . . 19  
(社会との関わり、視野を広げる)
- 7 これまでの研究の成果とこれからの課題 . . . . . 20  
(「地域に根ざし、持続可能な未来を切り拓く児童の育成」をめざして)
- 1・3・5 学年、なかよし学級 E S D カレンダー . . . . . 23  
(教科・領域との結びつき、教科横断的な学習)

\* 公開授業の学年については、各授業案の後を参照

## ＜「公開授業」授業案＞

○ 本校学習指導案について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27

学 年	2年生	教科等	生活科	ページ	29
授業者	教 諭 滝田美智代			場 所	1F ワークスペース
単 元 名	つたわる ひろがる わたしの生活 ～わたしたちのまちのひみつをつたえよう～				
本時の見どころ	本時では、児童が自分たちで調べた「まちのひみつ」を参観いただいている方々に聞いていただきます。児童が伝えたいことがうまく伝わったかどうかを自己評価しながら、聞いていただく喜びやコミュニケーションの楽しさを味わう授業です。				

学 年	4年生	教科等	社会科	ページ	35
授業者	教 諭 吉田 貴子			場 所	教 室
単 元 名	わたしたちの県① 県の広がり ～調べよう、気づこう、福島の特色と環境～				
本時の見どころ	「自分たちで高速道路を作るとしたら」という想定のもと、建設に向けて予想される課題とその解決策をグループで話し合うことを通して、交通の役割や交通網の広がりや地形・地域の特色との関連を考える授業です。 なお、本時の学習のねらいから、児童の調べ活動の時間を十分に確保したいと考え、担任は2時間続きの学習活動をデザインしました。本日公開する授業は、2時間続きの1時間目です。				

学 年	6年生	教科等	総合的な学習の時間	ページ	39
授業者	教 諭 福本 拓人			場 所	教 室
単 元 名	白方から世界へⅡ ～アメリカ・ビデオレタープロジェクト②～				
本時の見どころ	本校は昨年度から「福島ESDコンソーシアム」に参加し、法政大学の坂本旬教授のご支援とご指導を受けながら、海外の学校とのビデオレター交流を行っています。相手からのビデオレターを読み解き、理解し、それを踏まえてこちらから何をどのように伝えれば、自分たちの思い・メッセージが伝わるのか。今回は、普段のグループだけではなく、ワールドカフェ方式での話し合いを通して考えます。				



# E S Dの視点に立った学習指導

## ～白方小学校のE S D～

福島県須賀川市立白方小学校

これは、本校が平成26年度から進めてきたE S D研究の内容について、できるだけ系統立ててまとめようとしたものです。本日の「公開授業」とともに、本校のこれまでの研究成果と課題につきましても、広く忌憚のないご意見をいただきますよう、お願いいたします。

### 1 E S Dの背景

---

大量生産、大量消費、大量廃棄型の経済成長と人口増加に伴い、地球上では、気候変動が進み、これに伴う洪水や干ばつ、生物多様性の喪失、資源の枯渇、食料生産への影響、貧困の格差等が進んでいます。世界の平均気温は、今世紀末までの間に現在より4.8度上昇するとの予測が出されるなど、状況はさらに緊急性を帯びており、我々が豊かな地球の資源を将来の世代にまで残すためには、持続可能な社会の実現に向け、直ちに一人一人が自らの行動を変革し、これらの課題に取り組むことが求められます。（日本ユネスコ国内委員会小委員会E S D特別分科会「持続可能な開発のための教育（E S D）の更なる推進に向けて」2015年8月4日）

こうした危機感のもと、2002年の国連総会において、平成17（2005）年から始まる10年間を「国連E S D（持続可能な開発のための教育）の10年（国連D E S D）」とすることが決議され、E S Dが世界各国のユネスコスクールを中心に推進されてきました。

この国連D E S Dは、その後継プログラムである「E S Dに関するグローバル・アクション・プログラム（G A P）」に引き継がれました。G A Pにもあるように、「持続可能な開発」は、政治的合意、財政的な動機付け、技術的な手段のみによって実現できるものではなく、一人一人の考え方や行動の変容が求められます。この「変容」の実現に向けて、教育が果たすべき役割は大きいと言えます。

持続可能な社会づくりのためには、例えば冒頭に述べた課題とその原因について個別に考えるだけでなく、総合的な見方・考え方を身につける必要があります。また、グローバル化の進展に伴い、地球規模で物事を考える能力・態度が重要になってきます。

E S Dは、こうした資質・能力を身につけ、具体的な行動により持続可能な社会づくりを実現する人材の育成を目標とした教育です。

## 2 ESDとは

先に述べたように、世界には環境、貧困、人権、平和、開発といった様々な問題があります。ESDとは、これらの現代社会の課題を自らの問題として捉え、さまざまな人々と力を合わせて身近なところから取り組む（think globally, act locally）ことにより、それらの課題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出すこと、また、それによって持続可能な社会を創造していくことを目指す学習や活動です。つまりESDは、

持続可能な社会づくりの担い手を育む教育

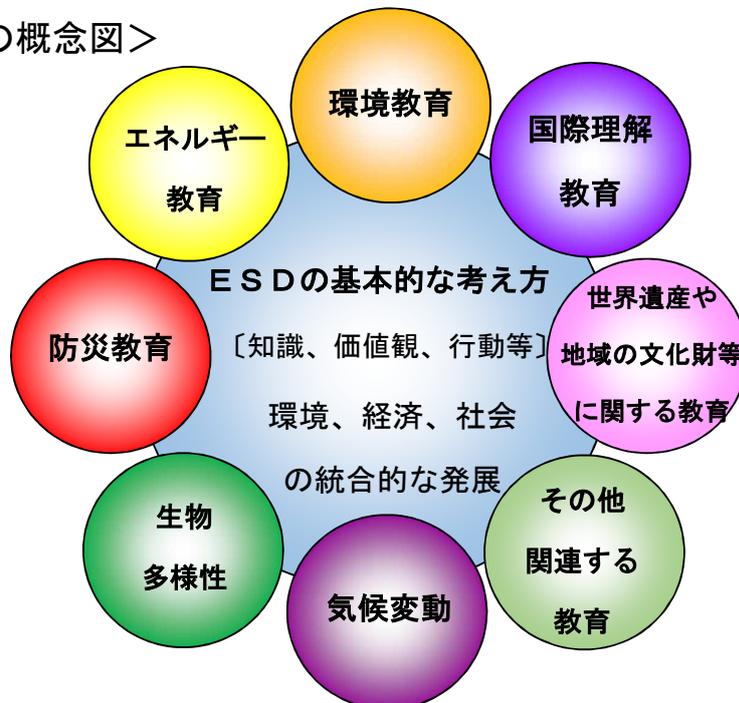
ということが出来ます。

また、ESDの目標は、「国連DESD」関係省庁連絡会議にて次のように設定されました。

すべての人が質の高い教育の恩恵を享受し、また、持続可能な開発のために求められる原則、価値観、及び行動が、あらゆる教育や学びの場に取り込まれ、環境、経済、社会の面において持続可能な将来が実現できるような行動の変革をもたらすこと（「国連DESD」関係省庁連絡会議 2006年）

そのため、環境、平和や人権等のESDの対象となる課題の取り組みをベースにしつつ、環境、経済、社会、文化の各側面から学際的かつ総合的に取り組むことが重要とされています。

### <ESDの概念図>



### 3 学校における E S D（E S D の視点に立った学習指導）

#### 3.1 『学校における持続可能な発展のための教育（E S D）に関する研究（最終報告書）』（国立教育政策研究所 2012年3月）より

これまで述べてきたことは、実践の場を学校教育に限定しているものではありません。N P O が中心となり、地域で E S D を実践しているところもあります。

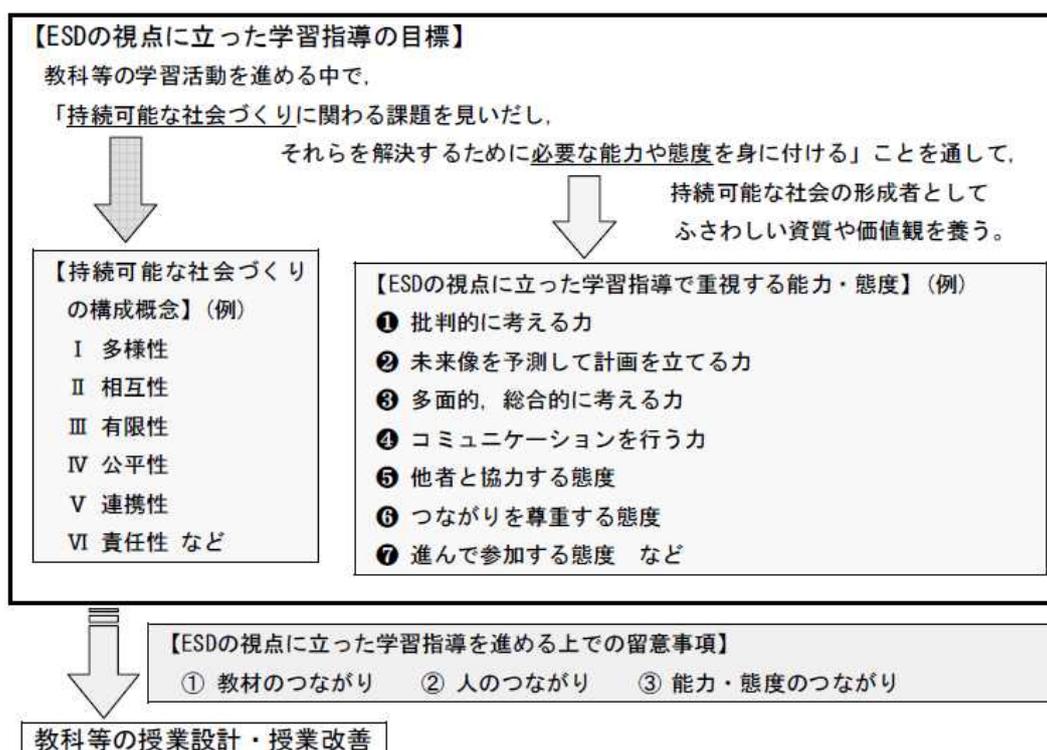
学校における E S D の実践については、国立教育政策研究所が平成 20（2008）年度から研究を始めました。これまでに、いくつかの研究報告が発刊されていますが、その最終的な報告書が平成 24（2012）年にまとめられました（以下『最終報告書』）。本校でも、これを基本として研究を進めています。

#### 3.2 E S D の視点に立った学習指導の目標

『最終報告書』では、上記の「E S D の目標」をふまえて、次章で述べるように、「学校で E S D を推進するためには、各教科等の授業の中で E S D の視点に立った学習を展開すること」を前提としたため、その目標を必要最小限に精選し、次のように設定しています。

持続可能な社会づくりに関わる課題を見だし、それらを解決するために必要な能力・態度を身に付けること

さらに、「各教科等の学習活動を進める中で、この目標の達成をねらいながら授業設計や授業改善を行うことが、持続可能な社会の形成者としてふさわしい資質や価値観を養うことに資する」という考えに基づき、次のような「E S D の学習指導過程を構想し展開するために必要な枠組み」を提案しています。



### 3.3 持続可能な社会づくりの構成概念（『最終報告書』表3）

上記「ESDの視点に立った学習指導の目標」にある「持続可能な社会づくりに関わる課題を見いだす」には、「持続可能な社会とはどのような社会なのか・どのようなことが実現できている社会なのか」ととらえる必要があります。そのための要素を、『最終報告書』では、「持続可能な社会づくりの構成概念」として、次のように6点を例示しています。各教科または単元等の目標や学習内容（教材）をこれらの要素に基づいてとらえた上で授業を設計・実践することにより、ESDの視点に立った学習指導の展開が可能になるとの考えからです。

ただし、本校のこれまでの研究では、①この「構成概念」の内容自体への理解が難しいこと、②これを授業づくりに具体的にどう生かしていくのかが見えてこないこと、が課題となっています。

表3 「持続可能な社会づくり」の構成概念(例)

人を取り巻く環境 (自然・文化・社会・経済など) に関する概念	I 多様性  いろいろある  【多様】	<p>自然・文化・社会・経済は、起源・性質・状態などが異なる多種多様な事物（ものごと）から成り立ち、それらの中では多種多様な現象（出来事）が起きていること。</p> <p>自然・文化・社会・経済は、それぞれの形成過程で様々な様相を見せ、多種多様な事物・現象が存在している。そうした生態学的・文化的・社会的・経済的な多様性を尊重するとともに、自然・文化・社会・経済にかかわる事物・現象を多面的に見たり考えたりすることが大切である。</p> <p>例) ◆生物は、色、形、大きさなどに違いがあること ◆それぞれの地域には、地形や気象などに特色があること ◆体に必要な栄養素には、いろいろな種類があること</p>
	II 相互性  関わり あっている  【相互】	<p>自然・文化・社会・経済は、互いに働き掛け合い、それらの中では物質やエネルギーが移動・循環したり、情報が伝達・流通したりしていること。</p> <p>自然・文化・社会・経済は、それぞれが互いに働き掛けあうシステムであり、それらの中では物質やエネルギー等が移動・消費されたり循環したりしている。人は、そうしたシステムとのつながりを持ち、さらにその中で人と人が互いにかかわり合っていることを認識することが大切である。</p> <p>例) ◆生物は、その周辺の環境とかわって生きていること ◆電気は、光、音、熱などに変えることができること ◆食料の中には外国から輸入しているものがあること</p>
	III 有限性  限りがある  【有限】	<p>自然・文化・社会・経済は、有限の環境要因や資源（物質やエネルギー）に支えられながら、不可逆的に変化していること。</p> <p>自然・文化・社会・経済を成り立たせている環境要因や資源（物質やエネルギー）は有限である。こうした有限の物質やエネルギーを将来世代のために有効に使用していくことが求められる。また、有限の資源に支えられている社会の発展には限界があることを認識することも大切である。</p> <p>例) ◆物が水に溶ける量には限度があること ◆土地は、火山の噴火や地震によって変化すること ◆物や金銭の計画的な使い方を考えること</p>
人（集団・地域・社会・国など） の意思や行動に関する概念	IV 公平性  一人一人 大切に  【公平】	<p>持続可能な社会は、基本的な権利の保障や自然等からの恩恵の享受などが、地域や世代を渡って公平・公正・平等であることを基盤にしていること。</p> <p>持続可能な社会の基盤は、一人一人の良好な生活や健康が保証・維持・増進されることである。そのためには、人権や生命が尊重され、他者を犠牲にすることなく、権利の保障や恩恵の享受が公平であることが必要であり、これらは地域や国を超え、世代を渡って保持されることが大切である。</p> <p>例) ◆健康でいられるような食事・運動・休養・睡眠などが保証されていること ◆自他の権利を大切にすること ◆差別をすることなく、公正・公平に努めること</p>
	V 連携性  力を合わせて  【連携】	<p>持続可能な社会は、多様な主体が状況や相互関係などに応じて順応・調和し、互いに連携・協力することにより構築されること。</p> <p>持続可能な社会の構築・維持は、多様な主体の連携・協力なくしては実現しない。意見の異なる場合や利害の対立する場合などにおいても、その状況にしたがって順応したり、寛容な態度で調和を図ったりしながら、互いに協力して問題を解決していくことが大切である。</p> <p>例) ◆地域の人々が協力して、災害の防止に努めていること ◆謙虚な心もち、自分と異なる意見や立場を大切にすること ◆近隣の人々とのかわりを考え、自分の生活を工夫すること</p>
	VI 責任性  責任を持って  【責任】	<p>持続可能な社会は、多様な主体が将来像に対する責任あるビジョンを持ち、それに向かって変容・変革することにより構築されること。</p> <p>持続可能な社会を構築するためには、一人一人がその責任と義務を自覚し、他人任せにするのではなく、自ら進んで行動することが必要である。そのためには、現状を合理的・客観的に把握した上で意思決定し、望ましい将来像に対する責任あるビジョンを持つことが大切である。</p> <p>例) ◆我が国が国際社会の中で重要な役割を果たしてきたこと ◆働くことの大切さを知り、進んでみんなのために働くこと ◆家庭で自分の分担する仕事ができること</p>

注1) 【】表記は、実践事例での略号 注2) 各欄の上段が構成概念の定義、下段がその補足説明

### 3.4 ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度（『最終報告書』表6）

学校の教育活動において、指導者は「その学習活動を通して子どもたちにどのような力を身につけさせたいのか」をしっかりとって指導を行うことが重要です。それはESDでも同様であると考えます。『最終報告書』では、学校教育においてESDを推進するために、ESDで育みたい力として諸機関で様々な挙げられている能力・態度を「生きる力」と関連づけて整理し、キーコンピテンシーとも関連づけながら、次の7点を例示しています。さらに、教科等の指導において、単元（題材）の目標や授業の目標に、これらに基づいたものを付加したり関連づけたりすることを通して、ESDの視点に立った学習指導が展開できる、とも述べています。

ただ、示された「7つの能力・態度」では、各項目の内容やその細分化が小学校段階での学びと距離がありすぎ、具体的な指導内容や児童の姿がイメージしにくいことから、本校では、後述のように再構成を試みました。また、これらを生かして日常の授業を「ESDの視点に立った学習指導」にするために、「単元本来の『単元の目標』と『重視する能力・態度』を合体させて、ESDの視点に立った新たな単元の目標」を設定して授業を行っています。これについても後述します。

表6 ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度(例)

ESDで重視する能力・態度		キー・コンピテンシー
① 批判的に考える力 《批判》	合理的、客観的な情報や公平な判断に基づいて本質を見抜き、ものごとを思慮深く、建設的、協調的、代替的に思考・判断する力 例) ○ 他者の意見や情報を、よく検討・理解して採り入れる。 × 得られたデータや考え方を鵜呑みにする。 ○ 積極的・発見的に、よりよい解決策を考える。 × 消極的、悲観的に考え、すぐに諦める。答えだけを得ようとする。	相互作用的に道具を用いる。
② 未来像を予測して計画を立てる力 《未来》	過去や現在に基づき、あるべき未来像（ビジョン）を予想・予測・期待し、それを他者と共有しながら、ものごとを計画する力 例) ○ 見通しや目的意識をもって計画を立てる。 × 無計画にものごとを進めたり、その場しのぎをしたりする。 ○ 他者がどのように受け取るかを想像しながら計画を立てる。 × 独り善がりにものごとを進めてしまう。	
③ 多面的、総合的に考える力 《多面》	人・もの・こと・社会・自然などのつながり・かかわり・ひろがり（システム）を理解し、それらを多面的、総合的に考える力 例) ○ 廃棄物も見方によっては資源になると捉えることができる。 × 役に立たないものは不要だと考える。 ○ 様々なものごとを関連付けて考える。 × まとまりがなく、きれぎれの見方をする。	
④ コミュニケーションを行う力 《伝達》	自分の気持ちや考えを伝えるとともに、他者の気持ちや考えを尊重し、積極的にコミュニケーションを行う力 例) ○ 自分の考えをまとめて簡潔に伝えられる。 × 他者の意見の欠点ばかりを指摘し、自分の考えを言わない。 ○ 自分の考えに、他者の意見を取り入れる。 × 他者の意見を聞こうとしない。	異質な集団で交流する。
⑤ 他者と協力する態度 《協力》	他者の立場に立ち、他者の考えや行動に共感するとともに、他者と協力・協同してものごとを進めようとする態度 例) ○ 相手の立場を考えて行動する。 × 自分のことしか考えない。 ○ 仲間を励ましながらチームで活動する。 × 身勝手な行動、同調しない態度をとる。	
⑥ つながりを尊重する態度 《関連》	人・もの・こと・社会・自然などと自分とのつながり・かかわりに関心を持ち、それらを尊重し大切にしようとする態度 例) ○ 自分が様々なものごととつながっていることに関心をもつ。 × 自分のすぐ回りのものや直接関係のあることしか関心がない。 ○ いろいろなもののお陰で自分がいることを実感する。 × 自分は一人で生きていくと思いつく。	自律的に活動する。
⑦ 進んで参加する態度 《参加》	集団や社会における自分の発言や行動に責任を持ち、自分の役割を踏まえた上で、ものごとに自主的・主体的に参加しようとする態度 例) ○ 自分の言ったことに責任を持ち、約束を守る。 × 無責任な行動ばかりで、きまりを守らない。 ○ 進んで他者のために行動する。 × 自分が得をすることしかしない。	

注) 《》表記は、実践事例での略号

## 4 白方小学校の E S D

---

本校は平成 25（2013）年 9 月にユネスコスクールへの加盟を承認され、平成 26（2014）年度より本格的に E S D の研究に取り組んできました。

ここでは、これまでの研究内容を踏まえ、「E S D の日常的な実践」「『E S D の視点に立った学習指導で重視する能力・態度（『最終報告書』表 6）』の再構成」「E S D カレンダーの作成と活用」「『白方フェスタ』での発表」の 4 点にわたって示します。

### 4.1 E S D の日常的な実践

#### 4.1.1 「E S D の日常的な実践」を研究主題に取り上げた経緯

本校は、次のような研究主題を掲げて E S D の研究を進めてきました。

<研究主題>

地域に根ざし、持続可能な未来を切り拓く児童の育成～E S D の日常的な実践を目指して～

平成 23（2011）年 3 月 11 日の東日本大震災とそれに伴う東京電力福島第一原子力発電所の事故により、福島県内の学校の教育活動は、程度や期間の差こそあれ、制約を受けました。本校は、平成 26（2014）年の夏に校地内の全面除染が終了し、やっと正常な教育活動が可能になりました。

当時、厳しい状況の中、子どもたちは毎日元気に登校し、一生懸命に学習活動を続けていました。そのような中だからこそ、現状をしっかりと見つめ、未来を切り拓くたくましい児童を育てたいと考え、ユネスコスクールへの加盟を目指しました。

合わせて、E S D の推進拠点となるユネスコスクールとして、これまでの教育活動を E S D の視点から見直すとともに、制限された中でも日常的に実践できる E S D のありかたを研究していくこととしました。

これまで述べてきた中にも、「各教科または単元等の目標や学習内容（教材）をこれらの要素（＝6つの構成概念）に基づいてとらえた上で授業を設計・実践することにより、E S D の視点に立った学習指導の展開が可能になる」「教科等の指導において、単元（題材）の目標や授業の目標に、これら（＝7つの能力・態度）に基づいたものを付加したり関連づけたりすることを通して、E S D の視点に立った学習指導が展開できる」（どちらも『最終報告書』より）とあるように、もとより E S D の視点に立った学習指導は、「各教科等の学習活動を進める中で、この目標の達成をねらいながら授業設計や授業改善を行うことが、持続可能な社会の形成者としてふさわしい資質や価値観を養うことに資する」（『最終報告書』）という考え方で推進されるものです。

#### 4.1.2 各教科等でつけるべき力とESDで育む力の双方を高めるために

前述したように、ESDの視点に立った学習指導を考えると、ESDに取り組む際の各教科等との関連等について、本校では次のようにとらえています。

- ① 各教科等の目標を達成するための学習活動を通して、ESDで育む力（「表6 ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度（例）」）を育成する、という関係である。
- ② あくまで主たるものは「その教科等で達成すべき目標」であって、その目標を達成し、『学習指導要領』の理念である「生きる力」を育むための方法としてESDの考え方や手法が位置づけられる。
- ③ その結果として、児童に「持続可能な社会の構築」（「表3 「持続可能な社会づくり」の構成概念（例）」）を担うために必要な資質や価値観を養うことをめざす。

また、本校は「全国学力・学習状況調査」等の結果の向上が課題の一つでもあり、各教科等につけるべき力とESDで育む力の双方を高めることが必要でした。

そこで、本校では、日常の授業を「ESDの視点に立った学習指導」にするために、「授業が変わるとは『ねらい』が変わること」という考えに立ち、単元本来の「単元の目標」と「ESDで育む力」（「ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度」）を合わせて、「ESDの視点に立った新たな単元の目標」を設定し、それを実現するための学習を意図的・計画的・日常的に実践していくことに取り組んでいます。

これにより、担任は、「ESDカレンダー」（後述）と合わせて、ESDと各教科等の指導の関連を授業レベルでイメージすることができるようになりました。

また、授業づくりの際に「その授業（単元）本来のねらいを達成させる方策」と「ESDの力を育む方策」を絡めて考えることで、二つの方策が互いに補完し合い、互いの効果を高めていくことにつながることもわかってきました。

## 4.2 ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度（『最終報告書』表6）の再構成

前述したように、『最終報告書』で示された「ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度」では、各項目の内容やその細分化が小学校段階での学びと距離がありすぎ、具体的な指導内容や児童の姿がイメージしにくいと考えました。また、ESDの視点に立った学習指導のデザインにあたっては、私達は『学習指導要領』の理念が「生きる力」の育成であり、そのために「生きる力」と「ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度」（最終報告書）の関連を自覚的に踏まえることが必要です。

そこで本校では、次頁のような再構成を試みました。ただし、このような読み替えやカテゴリー分けは適切か、「生きる力」との関連は適切なのかなど、今後の課題とすべき点も多くあると考えています。

## 白方小学校のE S Dの視点に立った学習指導で育む能力・態度

「生きる力」との 関連	白方小のE S Dで育む4つの能力・態度			『最終報告書』 「7つの能力・態度」と の関連
〔知〕 ○思考力 ○判断力 ○課題発見能力 ○問題解決能力	多様な観点 と見通し	多様な観点から考 え、見通しを持って よりよい解決策を考 える力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ さまざまなものごとを多面的に見つ め、それをほかの分野や自分の知 識・経験などと関連づけて総合的 にとらえ、批判的に考えて判断す る力</li> <li>・ 見通しを持って、よりよい解決策を 積極的に考える力</li> </ul>	① 批判的に考 える力  ③ 多面的、総 合的に考える 力
〔知〕 ○表現力 〔徳〕 ○協調性 ○感動する心	交流と協力	気持ちや考えを交 流させ、協力して取 り組む態度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自分の考えを持つとともに、それを 他者にしっかり伝えて、協力して実 行する態度</li> <li>・ 相手の立場を尊重しながら、自分 の気持ちや考えを伝え、積極的に コミュニケーションを行う態度</li> </ul>	④ コミュニケー ションを行う力  ⑤ 他者と協力 する態度
〔徳〕 ○協調性 ○感動する心	つながり	さまざまな人や社 会、自然などのつ ながりを尊重する態 度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自分と人・社会・自然などのつな がりに関心を持ち、尊重するととも に大切にしようとする態度</li> </ul>	⑥ つながりを尊 重する態度
〔知〕 ○判断力 〔徳〕 ○自律心	主体的・計 画的	よりよい未来をめざ し、その実現に向け て主体的・計画的 に取り組む態度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ よりよい未来を思い描きながら、そ の未来を実現するために必要なこ とに進んで計画的に取り組む態度</li> <li>・ 学んだことをもとに自分の生活を 振り返り、よりよい生き方を考えよ うとする態度</li> </ul>	② 未来像を予 測して計画を 立てる力  ⑦ 進んで参加 する態度

<生きる力>・・・知・徳・体のバランスのとれた力

確かな学力〔知〕：基礎・基本を確実に身に付け、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判  
断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力

○思考力 ○判断力 ○表現力 ○課題発見能力 ○問題解決能力

豊かな人間性〔徳〕：自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心

○協調性 ○自律心 ○感動する心

健康・体力〔体〕：たくましく生きるための健康や体力

○運動に親しむ ○健やかな体

### 4.3 ESDカレンダーの作成と活用

「ESDカレンダー」は、ユネスコスクールの先進校である江東区立東雲小学校で開発され、「教科横断的な学習の進め方」を「見える化」した年間指導計画です。本校でも、ESDを日々の授業の中で日常的に実践するために、江東区立八名川小学校のものを参考にさせていただいて作成しました。

これにより、ひと目で、いつの時期に、どのような視点を持って、どのような学びを、どのような教科・領域と関連付けて取り組むのかが、だれにでも分かる年間指導計画にすることができました。

本校では、ESDカレンダーの作成作業を通じて、教科・領域間の関連について担任が意識を持つことがまず重要であると考えています。さらに、具体的な児童の姿をイメージして指導の工夫を行い、どのようにつなげていったら児童の実践的な態度に結びつくのか、実践を重ねながら修正していくことが必要であると考えます。

また、ESDカレンダーの活用について、これを担任だけが持つのではなく、児童も同じものを持つことにより、児童のESDの学びへの意識を高め、見通しをもって学習に取り組むことができるのではないかと考えています。ESDカレンダーの担任と児童が一体となった作成および活用については、今後の研究課題です。

#### 4.4 「白方フェスタ」での発表

本校では、各学年の学びと6年間を通しての学びが児童にとってストーリー性のある問題解決的なものとなるよう、次のようにテーマを設定しています。設定にあたっては、担任や児童の課題意識を生かすことができるよう、ある程度大きな内容にしています。

ただ、これらのテーマによるE S Dの学習は始めたばかりです。学校や地域の実態に合い特色を生かした学習ができるか、児童の発達段階に合っているか、E S DやE S Dの視点に立った学習指導の目標を達成できるものになっているか、など、実践を通して検討すべき点が多くあると考えています。

- 1 学年：「見つけよう 知らせよう いろいろなひみつ」（学校のもの・ひと・こと）
- 2 学年：「見つけよう 知らせよう いろいろなひみつ」（学校のまわりと自分自身）
- 3 学年：「白方のよさを見つけよう」（白方と須賀川市に目を向けて）
- 4 学年：「私達を取り巻く環境」（岩瀬から県へ）
- 5 学年：「私達の生活と環境」（国とのつながり）
- 6 学年：「白方から世界へ」（環境・歴史・平和・伝統文化）

また、本校では10月に「祖父母参観」という、保護者・祖父母・地域の方々・学校の教育活動にご協力をいただいている方々をお呼びしての大きな行事を毎年行っています。この中に、「白方フェスタ」という児童の発表の場を設け、E S Dで学んだことを発信（発表や中間発表）しています。

担任は、これを見据えたうえで、生活科や総合的な学習の時間を中心にテーマに基づいた長期的な学びをデザインします。児童は、「白方フェスタでの発表」ということも一つの目標としつつ、E S Dの学習を進め、主体的な学習態度や表現力・プレゼンテーション力を身につけていきます。



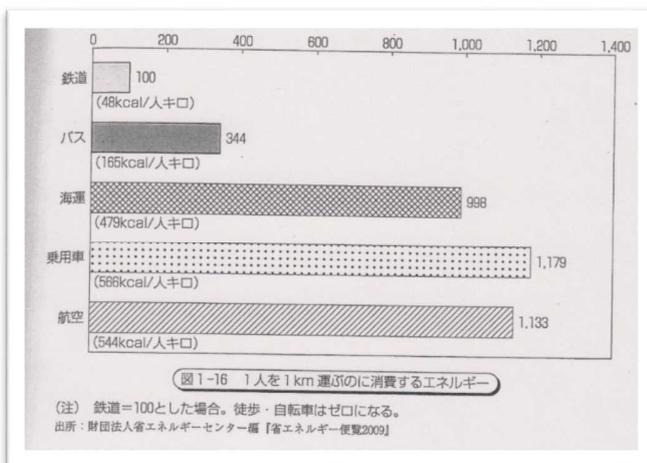
## 5 白方小学校 ESD の授業づくり

### 5.1 ESD の視点に立った学習指導とは？～第 5 学年「算数科の授業」の検討

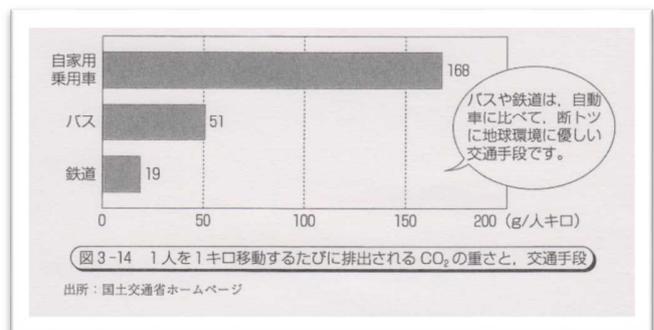
#### 5.1.1 ESD と各教科等をつなぐ教材への気づき・発見・開発・授業の工夫

「バスや電車は本当に環境にやさしいのだろうか？」と、普段から思っていました。バスは、いつも大きなエンジン音で、黒い排気ガスを出して走っています。電車は電気をたくさん使う気がします。

しかし、次のグラフを見たとき、目から鱗が落ち腑に落ちました。交通機関が環境にやさしいかどうか、どうやって示すことができるのかが分かったからです。そして、それが一目瞭然だったからです。



(a)



(b)

<水山光春編著『よくわかる環境教育』ミネルヴァ書房（2013年）より>

これは授業に使えるのではないかと、すぐに思いました。

ではどのように使うか。

一見して、今の教育課程の中の、ある教科等やどこかの単元にストレートに結びつくものではないことは分かります。しかし、逆に、ストレートに結びつく資料ではないからこそ、特定の教科等を設けて実施するのではないかと、ESDの資料として使い道があるのではないかと。この資料の内容や示され方に関連する教科等・単元で、これを使えば、それはESDの授業になるのではないかと。

たとえばESDでブナ林から環境問題、特に「地球の温暖化」などに着目している5年生では・・・

5.1.2 算数科「単位量あたりの大きさ」での、この資料を使った授業（平成26年度実施）

教頭が5年生の補欠に入ったとき、「今日は『単位量あたりの大きさ』の学習が終わってまとめの学習だ」と聞きました。「やるなら今しかない」と考え、誠に勝手ながら、この授業をさせていただきました。

\*\*\*\*\*

\* (b) のグラフをもとに次のような問題に作りかえる。

いろいろな乗り物が1 km走るのに出す二酸化炭素の量は次の通りです。

① 自動車 840 g (5人乗り)  
 ② バス 2,040 g (40人乗り)  
 ③ 電車 1,900 g (100人乗り)

どれが一番環境にやさしい乗り物といえるでしょうか？

T : 「地球にやさしい乗り物」というと、どんなものを知っていますか？

C : 電気自動車、自転車、電車・・・

T : これらは、どうして「地球にやさしい乗り物」なのですか？

C : 二酸化炭素を出さないからです。地球温暖化の原因だから・・・。

C : (全員一致で) 電車です。

T : 理由を教えてください。

C : 煙を出さないから。

T : この問題の中から理由を説明できませんか？

C : じゃあ、自動車です。二酸化炭素の量が一番少ないから。

T : でも、煙を出しますよ。

C : やっぱり電車かなあ・・・

T : 他に何が分かれば、予想がつきそうですか？

C : 速さ

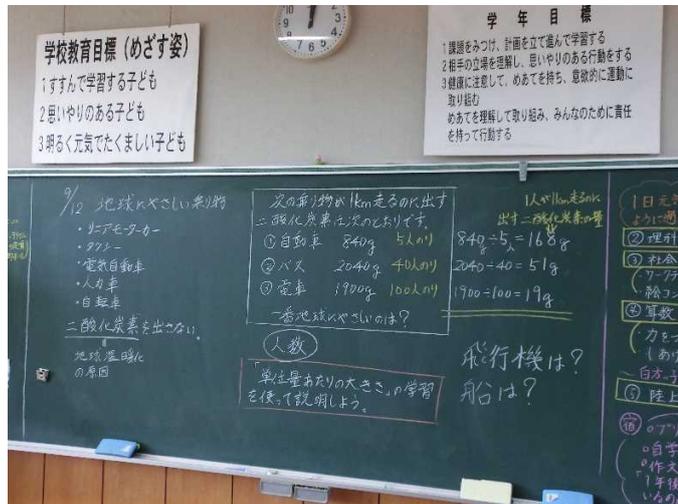
C : 人数 (この支持者は少ない)

C : 1 km走るのにこれだけ二酸化炭素が出るということだから、速さは関係ないと思います。

T : 人数がわかると、どうして地球にやさしいかがわかるの？

C : たくさん乗せて走れば、少くとも二酸化炭素が多くても大丈夫じゃないかと思います。

(その後、乗車人数を提示し、本時のめあてを板書して、答えを計算で出すよう指示。出てきた答えの単位から、その意味を考えさせた。その後の詳細は略。)



\*\*\*\*\*

5.1.3 今回の授業は、「算数科の授業の問題としてESDに関連した材料を用いた」という形である。果たしてこれは「ESDの視点に立った学習指導」といえるのだろうか？そして、「いえない」とすれば、どこをどうすれば「ESDの視点に立った学習指導」といえるようになるのだろうか？

『最終報告書』では、「ESDの視点に立った学習指導」の目標を、

持続可能な社会づくりに関わる課題を見だし、それらを解決するために必要な能力・態度を身に付けること

としています。では、

- ① 本時で児童は「持続可能な社会づくりに関わる課題を見だし」たか？
- ② 本時で児童は「（それらを）解決するために必要な能力・態度を身に付け」たか？

①について。児童は本時の資料から各種乗り物の二酸化炭素排出量を目にしました。そして、自動車はバスや電車に比べると、一人あたりの二酸化炭素排出量は格段に多いことを知りました。しかし、児童がそれを「持続可能な社会づくり」と関連させた「課題」としてとらえたかどうかは不明です。少なくとも、授業者からはその点に関する説明はしませんでした。

②について。この授業で児童は、本単元の本来の内容の他に、「乗り物が地球にやさしいかどうかは、乗車人員1人を1km移動させるたびに排出される二酸化炭素量で表すことができること」、「それを表すには「単位量あたりの大きさ」で学習した内容が役に立つこと」を知りました。これは、本時の資料の内容を児童が課題としてとらえ、それを解決しようとしたときには、必要な「能力」になり得るものと思います。前ページの板書写真を見ても分かるように、授業では、どの乗り物が一番地球にやさしいかを説明する手段として「単位量あたりの大きさ」での学習内容を使うことを、「めあて」として提示しています。

このことから本時は、たとえば『教育活動全体を通じて行う道徳教育の「要」としての「道徳の時間」のような位置づけ』、または『総合的な学習の時間に活用するための力を身に付ける教科等のような位置づけ』であるといえます。

つまり、本時単独ではESDの視点に立った学習指導とはいえませんが、これが、児童が見いだした課題と関連を持ち、それを解決するために役立つものであれば、ESDの視点に立った学習指導になり得るのではないのでしょうか。

児童の「持続可能な社会づくりのための課題設定」がまず必要なのです。それができていない段階では、ESDの視点に立った学習指導（授業）は成立しないと言えるのではないかと。

そこで、本校では、学年ごとのテーマに基づいて担任が長期的な学びをデザインし、担任の指導により児童が見いだした課題について調べ、発信し、行動するという学習の流れを想定しています。

## 5.2 ESDの視点に立った新たな単元の目標の設定～第6学年社会科の授業から～

### 5.2.1 「授業が変わる」とは何が変わることなのか？「授業が変わる」とは「授業案」のどこが変わることなのか？

授業が変わる・授業を変えるとは、何が変わることなのでしょうか。

それは、「授業案」のどこが変わることなのでしょうか。

授業を構成する要素や「授業案」のプロットはいろいろありますが、結論から言えば

「ねらい」が変われば授業が変わる。

と考えています。

「単元のねらい」が変われば本単元でつけたい力の内容が変わり、「指導計画」が変わります。

また、「本時のねらい」が変われば、発問や「指導過程」が変わります。

このような流れで「授業が変わる」のではないか、そして、これはESDに限ったことではなく、授業全てに言えることだと考えます。

### 5.2.2 ESDの視点に立った新たな「単元の目標」の設定～ESDで単元が変わる～

平成26年度6学年担任の吉田教諭は、本単元で重視する「ESDの能力・態度」を「白方小学校版」の4つのカテゴリー別に具体的に示し、その上で、この単元本来の「単元の目標」とその「ESDの能力・態度」を合体させて、新たな「ESDの視点に立った社会科「新しい日本、平和な日本へ」の単元の目標を設定しました。

これを比較のために並記すると、次のようになります。（「知識・理解」のみ示します）

	指導書に示されているもの	吉田教諭の設定したもの
知識・理解	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 戦後、我が国が民主的な国家として出発し、国民の不断の努力によって国民生活が向上し、国際社会のなかで重要な役割を果たしてきたことがわかる。</li> <li>・ 自分たちの生活の歴史的背景を理解している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 平和主義により、国際社会の中で重要な役割を果たしてきたという立場を理解している。</li> <li>・ 現在の日本の豊かさは、<u>過去の歴史と人々の努力によって積み重ねられている</u>ことを理解している。</li> </ul> <p>&lt;多様な観点と見通し&gt; &lt;つながりの尊重&gt;</p>

ESDの考え方を取り入れたことにより、これまでの学習を核として、持続可能な社会をめざした新たな目標による学習が意図的・計画的・日常的に実践できるようになります。

### 5.2.3 ESDの視点をういた「本時の学習」の検討～ESDで授業が変わる～

吉田教諭は、本時の授業で重視するESDの能力・態度を「多様な観点と見通し」としました。この、「多様な観点と見通し」の内容について、吉田教諭は授業案の中で、

戦後の改革が短期間で達成されたのは何によるものなのかを、既習の史実にもとづいて考えることができる力

としています。そして、この「多様な観点と見通し」との関連がある「単元の目標」を「関心・意欲・態度」「技能」「知識・理解」の3観点に設定しています。本時が上記の「多様な観点と見通し」を重視して進められるのであれば、当然授業の中に、この能力・態度を育てるような工夫や方策が必要です。

そうすると、授業者は、

- ① 戦後の改革が短期間で達成されたのは何によるものなのかを、既習の史実にもとづいて考えさせるにはどうしたらいいだろうか？
- ② 授業ではいつも「仮説を立てる」「検証する」という流れを取っているが、この時間では子どもたちが「多様な観点」（多面的・総合的＝ひと・もの・こと・社会・自然）からそれができるように工夫（資料の準備や発問）しよう。

など、「この授業の本来のねらいを達成させる方策」と「ESDの観点到立った方策」を絡めて考えていくこととなります。これは一見、「考えるべきことが増えて大変だ」とも思えますが、この二つの方策は互いに補完し合い、互いの効果を高めていくことになるものと考えます。

ESDの考え方にもとづいて新たな方策を取り入れ、その方策は、優先すべき授業本来の目標を達成するためにも効果的に働くこと。このことを意識して日々の授業をデザインしていくことは、本校のめざす「ESDの日常的な実践」そのものであると考えます。



### 5.3 ESDの評価

前述のように、本校では次のような方法によってESDの日常的な実践に取り組んでいます。

その教科等や単元本来の優先すべき「単元のねらい」と「ESDで重視する能力・態度」を合体させて新たな「単元の目標」を設定し、その実現をめざして実践する

そのため、当然、評価はESDを実践する教科・領域等の学習を通して行うこととなります。ただ、もとより、ESDで育む力はテストやレポートによる数値評価では評価しにくく、授業での児童の観察はもちろん、様々な方法で評価を行う必要があります。特に、児童が自分の学びを振り返り、自分の変容に気づくことができる「自己評価」と、それに基づいた教師評価が、ESDの学びでは重要であると考えます。

そこで、本校では、『全国小中学校環境教育研究会編 持続可能な社会づくりと環境教育（2014年日本教育新聞社）』を参考に、主に次のような方法で評価を行っています。

ただ、本校のESDの評価に関する研究は始まったばかりです。本校のESDの学びに合った評価の方法は、今後の研究課題です。

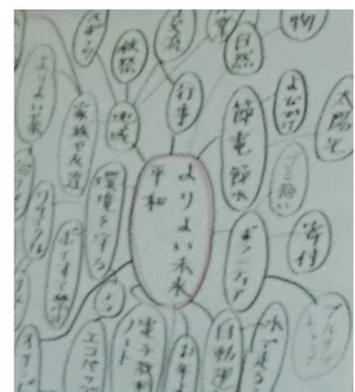
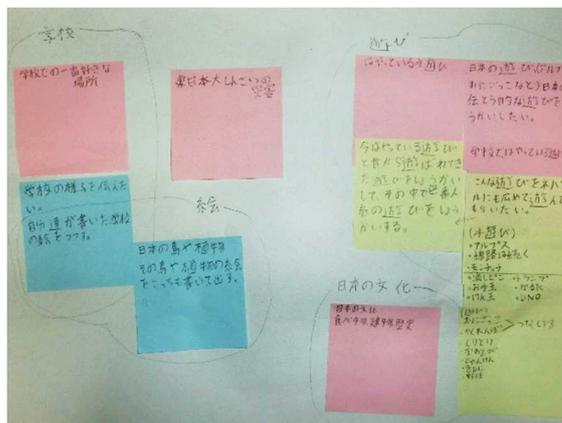
#### 5.3.1 ポートフォリオの活用

はじめに設定した課題、学習の途中で感じたり考えたりしたこと、分かったこと、行動したこと、調べて得た資料など、自分の学びの経過をまとめたものがポートフォリオです。ファイルに綴じ込む、厚紙を表紙にして糊付けをしていく、など様々な形態が考えられますが、児童自身が、自分はそのときどう考えて何を学んだのかを振り返ることができることが一番重要であると考えます。自己評価を継続していくことで、自分の学びを冷静に振り返るとともに、自分の変容に気づき、友達のよさにも目を向けることができるようになって考えています。これは、担任が児童それぞれのESDの学びについて評価する際にも、大いに役立つものです。

#### 5.3.2 イメージマップやKJ法などの思考ツールの活用

授業に積極的に思考ツールを導入し、その記録をポートフォリオに残しておくことも、学習とその評価の両面で重要であると考えます。

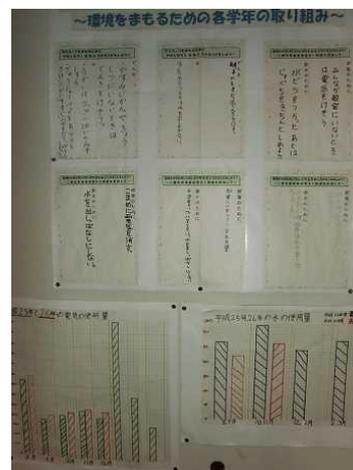
イメージマップは「物事の関係性を整理し、多面的・総合的に物事を考える活動として有効」（『全国小中学校環境教育研究会編 持続可能な社会づくりと環境教育（2014年日本教育新聞社）』）なツールです。また、学習の始めと終わりのイメージマップを比較したり、学習の途中で関係枝を増やしていきたりすることで、児童は自分の成長を実感することができます。



## 6 白方小学校の授業以外の E S D

### 6.1 「福島議定書」への取り組み

「福島議定書」は、福島県が温暖化防止のために節電や節水を呼びかけている活動です。児童会の「環境委員会」が、節電・節水を呼びかけるとともに、毎月の電気と水道の使用量をグラフ化して掲示して、変化がわかるようにしました。また、夜間や休日に体育館を使用する社会体育の団体にも協力を呼びかけています。



### 6.2 プルタブとエコキャップ回収、ユネスコ「寺子屋募金」への参加

児童会「運営委員会」が中心となり実施しています。運営委員会では、「地球のためにできることをやろう」「世界中の恵まれない子を救うために協力を呼びかけよう」などの委員会の「憲法」をつくり、E S Dの視点に立った活動を行っています。



## 7 これまでの研究の成果とこれからの課題（「まとめ」にかえて）

---

これまで述べてきたように、本校では、小学校におけるE S Dの日常的な実践に関して他に多くの先行研究がない中、手探りでE S Dの理論研究や先進校の事例研究、校内授業研究等を行ってきました。

ここでは、これまでの内容と重複する内容もありますが、「まとめ」にかえて、成果と課題をまとめてみました。

### 7.1 「E S Dの視点に立った学習指導」への理解と日常的な実践に向けた授業づくりが進んだこと

- (1) E S Dを日常的に実践する場合、その内容がE S Dにかかわるものというだけでは、E S Dの視点に立った学習指導とは言えない。児童が見出した課題と関連を持ち、それを解決するために役立つものである必要がある。E S Dの視点に立った学習指導の第1段階として、まずは児童の「持続可能な社会づくりのための課題設定」が必要であり、そこに十分な時間をかけることが重要である。
- (2) その単元でつけるべき「教科等の本来の力」と「E S Dで育む力」を合わせて「E S Dの視点に立った新たな単元の目標」を設定して授業づくりを行うことにより、担任はE S Dカレンダーによる指導計画と合わせてE S Dと各教科等の関連を授業レベルでイメージし、日常的に実践できるようになった。また、その際「その授業（単元）本来のねらいを達成させる方策」と「E S Dの力を育む方策」を絡めて考えることが、それら二つの方策が互いに補完しあい、互いの効果を高めていくことにつながることもわかってきた。
- (3) 「持続可能な社会づくりに関わる課題を見いだす」ためには、「持続可能な社会とはどのような社会なのか」をとらえる必要がある。そのために『最終報告書』に「持続可能な社会づくりの構成概念」が示された。本校でもこれをE S Dの授業づくりに生かし、具体的には「公開授業」の各授業案に示しているが、「E S Dの視点に立った授業づくり」のために、これをどの段階でどのように生かしていくことが効果的なのか、今後の課題である。
- (4) E S Dを日常的に実践するとき、その評価は実践する教科・領域等の学習を通して行われる。しかし、E S Dで育む力はテスト等による数値評価では評価しにくく、様々な方法で評価を行う必要がある。児童のE S Dの学びを確かに見取り、担任の負担が少ない評価の方法はどのようなものか、さらに研究を進めていく必要がある。
- (5) 福島県でのユネスコスクール加盟校は少なく、E S Dについてもまだまだ知られているとは言えない。昨年度自主公開した「E S D研究発表会」や今年度開催の「モラロジー教育者研究会」での発表、今回の「全国小中学校環境教育研究大会」等を通して、E S Dの理念やこれからの学校教育との関わり、授業づくり等についての理解を広げることができた。

## 7.2 「白方フェスタ」や「ビデオレター制作と交流」を通して「白方小のE S Dで育む4つの能力・態度」が身についたこと

- (1) 白方フェスタでは想定する観客が、ビデオレター制作では想定する視聴者がいる。E S Dの学習で調べた内容に関して、その想定する相手にどのようなメッセージを伝えたいのか、それはどのような表現方法を使えば伝えることができるのか等を担任等の指導のもとに考え、工夫する学習を通して、「白方小のE S Dで育む4つの力」が身についた。特に、児童の相手意識と表現力やプレゼンテーション力が高まり、言語活動の充実にも資するものとなった。
- (2) 福島E S Dコンソーシアムへの参加により、児童のI C Tスキルだけではなく、メディアリテラシーや異文化交流への意欲が高まった。一方で、外国の学校と交流を行う場合、言葉の壁だけではなく、E S Dへの温度差やこの学習に求めているもの（ねらい）の相違等、学習がスムーズに進まない原因となるものが多いこともわかった。コーディネーターとなる方や組織との連絡・調整を密に行うとともに、こちらの意思表示を明確な言葉で伝えることが必要である。
- (3) E S Dの推進拠点として、児童の発表、新聞等による報道、本校ホームページへの積極的な掲載等により、児童の具体的な学習の姿や成果の形でE S Dを広めることができた。

## 7.3 授業以外の場でも児童の活動が広がったこと

内容や写真は前述

## 7.4 E S Dの多様な学習を通じて、環境・人権・異文化理解・防災・食育等と児童の学習の視点が広がったこと